毎月一回15日発行昭和51年5月15日発行・第81号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

10月号

Le Libertaire

リベルテール

Vol. VI, No. 11

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和51年5月10日発行第81号
リベルテール　定価100円（郵便料共）

人類更生の大道アナキズム研究書

大杉栄主幹・労働運動・第1次～第4次　復刻　5,000円
純正無政府主義　農村社会革命講座八太舟三著　150円
階級闘争説の誤謬　八太舟三著　130円
無政府共産主義　－人類解放の道－八太舟三著　700円
無政府主義組織論　マラテスタ著　150円
選挙戦に際して　－付略伝－．マラテスタ著　150円
農民の中へ　マラテスタ著　200円
マフノの農民運動　石川三四郎著　150円
ベルテロー著／山鹿泰治訳
平民の鐘　－無政府の福音－　150円
無政府主義者は答える　岩佐作太郎著　150円
石川三四郎ほか三氏著
日本無政府主義運動史　第一編　350円
反逆者の牢獄手記　大杉・朴烈ら十二氏著　200円
獄窓から　－増補決定版－　和田久太郎著　800円
死刑囚の思い出　－増補決定版　古田大次郎著　700円
－－・二皇居発煙筒事件訴訟記録－
天皇制破壊への渦動　300円
植谷雄高氏の天皇批判の証言収載
雑誌労働運動（大正13年3月号発禁を復刻）
大杉栄・伊藤野枝追悼号　400円
漫文・漫画　大杉栄・望月桂共著　1,000円
自治民範（全）　権藤成郷著作集　第一巻　3,000円
正義と道徳　クロポトキン著麻生義訳　250円
難波大助大逆事件　虎ノ門で現天皇を狙撃　900円
弁証法的唯物史観の批評　石川三四郎著　150円
無政府主義とサンジカリズム　石川三四郎著　150円
進化と革命　補正版　付石川書簡集
ルクリュ著　石川三四郎訳　150円

何が私をこうさせたか　金子ふみ子獄中手記決定版　2,400円
解説：瀬戸内晴美　金子ふみ子歌集　500円
権藤成郷著作集2　農村自救論・日本農制史談　3,000円
大杉栄秘録　増補　堀保子ほか19氏著　1100円
無政府主義論　エンリコ．マラテスタ著　300円
ディナミック　石川三四郎個人紙復刻版　3,000円
アナキスト革命　ジョージ．バレット著　150円
西洋社会主義運動史　石川三四郎著　1,000円
ロシア革命の批判　Aベルクマン著　200円
黒色青年　黒色青年連盟機関紙　大正15年　2,500円
創刊号より昭和6年終刊号まで復刻
黒色戦線　アナキズム文芸思想誌　第1次　5,000円
昭和4年創刊号より終刊号まで復刻
労働運動第5次昭和2年復刊号より終刊号復刻　〈近　刊〉
差別とアナキズム・水平社運動と
アナ・ボル抗争史　宮崎晃著　1,600円
君民共治論　権藤成郷著作集第3巻　3,000円
無支配への道　マラテスタ著作集1　300円
アナキズムのABC　ベルクマン著　100円
古事記神話の新研究　石川三四郎選集1　2,500円
〈解説・石川三四郎論　大沢正道〉

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田　電0270-24-0776
郵便振替口座　宇都宮 11015 黒色戦線社　大島英三郎
東京事務所　電03-735-1246
〒144 東京都大田区西蒲田7丁目61番8号エンリコビル4階
国鉄蒲田駅西口下車，蒲田銀座アーケード街歩いて5分突き当り
左隣，毎月第2,第4日曜午後1時より4時共学読書会,初心者に公開
販売書店　東京，神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・
早稲田文献堂．京都市中京寺町二条上・三月書房

■ リベルテール　Le Libertaire
■ 1976年5月15日 発行　VoL, VII, No. 10
■ 編集兼発行者　三浦精一
■ 発行所　東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方　リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京133830番 三浦精一

「われらのバクーニン」製本できる!!

かねてから広告中の表記の本が堂々二一六頁プラス写真八頁をもって完成しました。注文して下さってまだ受取っていない方は勿論のこと、これからの方もすぐ申込んで下さい。少部数（五〇〇部）なので、この機会を逃すと当分入手できません。製本はリベルテールの若い有志達が生まれて初めてやりました。すべて手作りの味いで、多分そしてかなり堅牢な筈です？　A5版3頁に亘る正誤表と5頁の英・独・仏・解説付の前代未聞、本屋（模索舎）さんが保証した〈バクーニン総集編〉です。

発行所　リベルテールの会
定価　八〇〇円郵送料込

目　次

巻頭言……1
敗戦の兵は語る……2
リベルテール・サロンの移動について……4
非暴力を考える……鈴木光一　5
米国自動車労働界の寸描……ハギシン　8
「黒連」と私の立場……江藤敏和　9
野火……11
海外だより
マーチン・ソースターは語る(1)……14

11・10天皇制を考える集会

在関東の同志により11・10集会実行委が形成され左記の通り集会が予定されています。アナキズム戦線の新たな蘇生に向けて振って参加下さい。

時・十一月十日　午後一時より
所・中央労政会館　国電水道橋下車（お茶の水寄り出口後楽園ジム隣）トルストイ研究会の名で借用。

巻頭言

「市民社会主義」

10月4日付朝刊で報じられた記事をみると、革新派内の名うての保守的体質の人びとが集り新党構想でもって「市民社会主義」なる新語を造り、ぶちあげている。セールスポイントは労働者の経営参加である。ぼくのように寝床は埼玉県民で職場は東京都民の者にとり、市民と社会主義はよく結びつかない。むろんここで言う「市民」は具体的な上尾市民や神戸市民ではなく、イデオロギーとしての市民であって、衒学的に語義を訊ねるとBurgerやcitoyen（シトワイヤン）になるだろう。また古代ギリシアやローマの市民に祖先をもつのかも知れない。その市民の「社会主義」だと言われているのだ。社会と名がつけば「昆虫の社会」という名の本だって禁圧された時代があったとは嘘のような本当の話として語られているが、時代が変ったのである。主唱者側の意図では混沌化している保守政権の受皿になりたい、社会に顕在化している各種の市民団体　住民活動を吸収合併して一大新党を作りたい様子が見えみえだが…果してそう旨く事は運ぶものかどうか。あの労働者の経営参加だって、善意の企業が試みているそうだが（ダイヤモンド社刊〝エコノミスト〟誌7月号参照）未だしの感がある。理由は勤務先の会社の株券を持たせたり、重役会議に出席させたぐらいで経営参加だなんて—まずその従業員を株主や重役になったつもりにさせて堕落させ、労働の権利主張のほこ先を鈍らせ、経営のきびしさにつき責任をもたせない事によって、甘えの構造を強化し、遂には労資協調や企業一家意識でせいぜい国益と二人三脚を組む、意識だけの中産階級、プチブルを再生産するだけだろう。

「市民社会主義」とはどんな社会主義なのか？　英国の左翼誌〈ニューステイツマン〉の定義によると第三世界の社会主義は社会民主主義と民主社会主義があり、前者はドイツ社民党のように社会における生産手段の共有化、平等を主眼とし、後者は社会における構成員の自由を第一義にするものだとしている。この二つが市民権を得ている社会主義だとすれば、先の「市民社会主義」は現にイデオロギーを嫌いつつ社会における自由と平等を求めてやまないわが民衆に何を与えようとするのか—推察すれば、好意的にみて自由が主座を占めそれから平等なのだから、民主社会主義であろう。羊頭をかかげて狗肉を売るとはこんなのを言うのである。

（莫空人）

敗軍の兵は語る

横倉辰次

私が東京電気株式会社の不当の料金値上げや公共企業にあるまじき不正行為に対しての抗議の最初は値上げを認めず「電気代を旧料金で支払う会」に参加して東電の不正をただそうとしました。東電は頭初は送電停止を以て恐喝して会員に支払を迫ったが、大衆の与論圧力に屈して只一軒の「旧料金の会」の会員の家の送電停止をなし得ず、ただ低姿勢で支払いを哀願してきたが、誰れ一人支払はないので東電はふてくさって時を待って国家権力を頼る手段に出るのだった。

そして電気使用者の質問に対してダンマリで問答無用戦術に出たのだった。

我々「旧料金」の会員の質問ケ条は左の如きものであった。

第一は、敗戦後数十年に渡っての自民党に対する献金の総額の公開、自民党の誰に渡したか、何閥に渡したかを明示せよ、その政治献金の不正さを知り急に取り止めた今日、その献金を如何なる方法で大衆に還元するか。

第二は、東電は健全財制で優良株で配当をしながら何故に電気料金の値上げをするのか、その値上げの最初は不徳漢田中角栄の通産大臣時代で、田中の認可で値上げしているのが納得出来ない、その後も次々と値上げしているのには黒い霧があるのではないか。

第三、これ以上の電気不要という大衆の声を無視し、全国各地に現地住民の不対を無視し原子力発電所を設置しようとしているのは何事か、その設備費には厖大な金が動いている、恐らく洗えばロッキード事件以上の問題が暴露されるのではないか。

原子力発電所設置を即座に廃止せよ。

第四、電気料金は何故、値上げするのか、原価計算を明示せよ。

等であったが、これに対して何等の回答はなく、東電本社に質問に行けば、鉄柵を閉め屈強な従業員が人垣を作り阻止し、面会を拒否して、話し合に応じなかったのだ。

そしていたずらに日は経過し、半歳を過ぎると国家権力をたよって差し押え手段に出るのだった。

この東電斗争は、このインフレをもろに頭から引かぶる家庭の主婦に拠って推進されていたので、東電は、その主人の勤め先きに厭がらせの電話を掛けたり、月給の差し押えを強行したので、本年（一九七六）二月から三月にかけて多くの「旧料金の会」の人々は、余儀なく電気代を支払わされたのだ。

悲しき敗退であった。

その時、我が家は月給取りでないので此の難を避けたが、東電は簡易裁判所を使って戦を挑んで来た。それに対し私は、簡易裁判所の要求の異議申し立てに応ぜず、異見書を提出した。それは裁判斗争の無意味と不利と裁判所なるものの実体、裁判所が何十年に渡って大衆の味方でないと反撥し実例をあげた。

公害の原点である足尾公毒事件から明治四十二年の大逆事件、大正十二年の大杉栄や小林多喜二虐殺事件に裁判所はソッポを向いていたではないか、最近になっては敗戦後になってCIAの魔手に対して何等、手が出なかった、敗戦後三十有余年間に日本の裁判所が正しい事をしたと言えば僅かに松川裁判と自衛隊違憲裁判位いなものではないか。

松川裁判の場合は巨大な組織と莫大な資金があった為めに辛うじて正義が通ったのだ。

今、私は、そんな大きな組織も巨額の資金もないから裁判斗争は出来ないと言ったのに対して簡易裁判所は、何等の返答もせず、ダンマリでいたが、やがて卑怯にも書類を東京地方裁判所へ廻し、無裁判で東電の言分を一方的に通して無警告で、突然、我が家に執行官を派遣した。それに対してなじると執行官は「私は難かしい理屈は判らないが裁判所の命令だからやらせて貰います」の一点張りで我が家の物品を差し押えてしまった。

国家権力の暴力に対しては微弱な私としては手のほどこしようなく、僅か十万円の未払いに対して数倍額の物品を押えられたので仕方なく、泪を呑んで東電の要求の金額を支払わざるを得なくなり、女房が支払に行きましたのに対し東電品川支店の要求はドン欲でした。これは東電との斗いでなく黒い霧に包まれた国家権力に屈したのです。

日本政府は東電の犯罪的不法値上げを裁かず一方的に東電の味方をして大衆から不当な電気料金を収奪する限りは、やがて、その罪が暴露されるか、大衆の蹶起に依って裁かれるであろう。

個々で戦っていたのでは国家権を背景にしてる東電に圧殺されるので、今、大衆は「電気料金支払組合」を組織して勇敢に必死の斗争を開始しました。どうか皆さんも東電の不正不義に憤りがあるならば、振って「電気料金支払組合」に参加して下さい。

追補

リベルテール九月号十四頁　掲載の死亡通知の長芝義司さんは我等の先輩村木源次郎さんの甥子さんで、アナキストの良き理解者で援助の手を差し延べて下さった方です。

リベルテール・サロンの移動について

今迄しばらくの間水道橋周辺で行なっていたリベルテール・サロンを新宿に移すことにしました。この移動は新宿に共同で事務所を借りることができたため、行なわれるものです。従来、喫茶店で行なっていた時、激論等たたかわせることができませんでした。しかし今度は事務所の中ですので可能と思います。遠慮なくどなたでもリベルテール・サロンに参加下さい。

月の輪出版事務所におけるリベルテールの活動

☆リベルテール・サロン☆

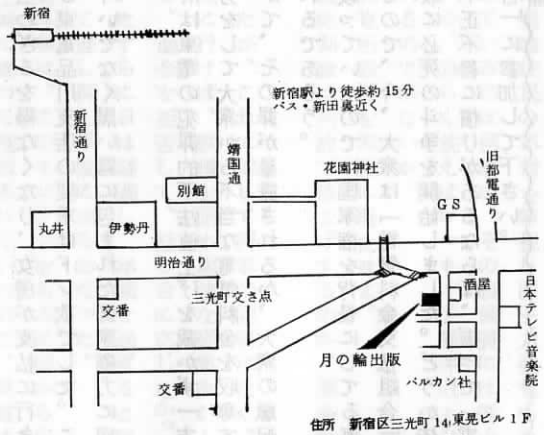
毎週火曜、午後六時半より九時（祭日、スト日中止）誰でも参加可です。前と同じようにおしゃべり会ですが、討論、提案などどんどん持ってきて話して下さい。

☆リベルテール編集会議☆

奇数の木曜日、午後六時半より。編集陣は継続的かつ責任を持って行なう人なら常に喜んであなたをまちます。無責任な参加は拒絶。

☆リベルテール研究会☆予定☆

第一火曜日、クロの相互扶助論の読書会を行ないます。三浦さんが講師。



広海貫一さん10月4日永眠

旧アナ連におられ熱帯魚屋さんをやっていた広海さんが死亡されました。謹んでお知らせします。

非暴力を考える

鈴木光一

〝非暴力〟という言葉を聞いたのはいつだったろう。中学生の頃だったように思う。先生がガンジーの話をして暴力を用いなくても目的を達することができる、というように言ったのだと思う。僕には非暴力という言葉はガンジーをすぐ思い出させる。

ところでガンジーの非暴力とは何だったのか。僕はついにガンジーに親しむ機会がなかったのでそれはわからないのだが、いつのまにか僕自身それを想像して言語化してしまっていた。それはインドという悠久な大地、仏教という諦観、それらが混り合ってインド大衆に向って呼びかけられた精神に泌み込むガンジーのインド独立への熱望ではなかったか、と。暴力を用いなくとも生活してこられたインド、そしてこれからも暴力を用いなくて生活していけるインド。そのうえ衝動的でないインドの人々。ここにおいてガンジーの非暴力が世界に喧伝されたのではあるまいか。

僕はこのように僕自身を納得させることによってガンジーの非暴力を「ああ、すばらしい」と嘆じ、一ペンたりとも御都合主義だなどと思わないできたのだ。

ところで日本人というか、僕が判別することのできる身の廻りの人々の非暴力というのは僕には我慢ができない。御都合主義というか、いいかげんというか何ともやりきれない。「闘いの中で死ぬほどの覚悟さえ持たない非暴力は、権力に対して、せいぜいひっかき傷ぐらいのものしか与えることが出来ない、迫力を欠いた行動ー」と言われてもしかたがないだろう。」この文章は例だが、これはひっかき傷とは暴力ではないか、それとも比喩のつもりでいっているのだろうか。この筆者はデモとかすわり込みもやり、それを非暴力といっている。どうしてデモやすわり込みが非暴力であることができようか。筆者自身非暴力とは何かわからないといっているから僕は追求しないが、暴力とは受ける側の認識でしかないのではないか。僕はそう思っている。

僕達は蚊が飛んでくれば手で捕え殺す。僕はこれは立派に暴力だと思う。蚊は死にたくて飛んできたんじゃない。それを殺されたのだ。殺した方は暴力を振ったのではない、というかもしれない。しかし蚊にとっては暴力をふるわれたんじゃない、と言えるか。これを単に蚊だけで考えてはならない。更に蚊を国とおきかえたっていい。蚊のように簡単に死にはしないが手で押されたり、すわり込まれたら暴力を振るわれたと感じるだろう。暴

力を振うという行為はなるほど目的意識に立脚し行為することのできる行為だが、目的意識すらもちあわせなく何げなくやられた行為が痛みとなり加害者に暴力を振われた意識を作り上げることだってできるのだ。これを暴力ではないというのか。弱い者が強い者にはむかう力は暴力でない、等僕には言えない。

非暴力という言葉はなるほどすばらしい言葉だ。この言葉には力にまかせて加害者とならないという謙譲さのようなものすら隠れているように思える。でも非暴力というのは自からが暴力を振うことを拒絶するということではないのか。たとえどのような被害を受けようとも。普通の日常生活を行ない、積極的に悪いことは行なわないが、積極的に行為を行なわないこと。

僕は言葉の魔術を使うのは大嫌いだからまわりくどい文を引用しないけれど、非暴力とは反抗の技術でも革命の理論でもない、そんなものに落しめてはならない人生への一つの自分の供持する対応だと思うのである。できないかもしれないが求めてやまず、という。

正当防衛的に暴力を振うものの暴力を防ぐのは、例え物理力であっても暴力ではない、というのは僕には御都合主義に思えるのだ。ここでは暴力は言葉の綾になってしまっている。そんなものではないはずだ。相手に痛みを与えることのできる力は暴力以外の何物でもないはずだ。

暴力は不当な利益を得んとする目的を持った力の行使だ、と考えるなら不当な利益を求めないということによって非暴力を振うことができるかもしれない。しかしそれを個人的な判断にゆだねられた時、行為に対する判断として僕は間違えることなく不当な利益を求める行為を行なわないなど言えない。そして他人も僕はそうだと思う。だとしたらこのような非暴力とは単に政治的に集団の中に埋没してしまうだろう。しかし集団の中に埋没したそういう非暴力は僕には個人に対して常に権力をはらんだ、そしてしばしば気分としての正義という独断をはらんだ集団意識でしかないと思えるのである。いわばあの無責任な集団意識。

僕は「権力によってなされた革命はあらたな権力を生む。だから非暴力で」という考え方にはまっこうから反対する。「権力のある所に自由はない。」「暴力は新たな暴力を生む。」というような考え方にも反対だ。そのようなスローガンはすてきかもしれない。しかしそれを根底においた思考などおおよそ現実ばなれしているとしか考えられない。なるほど革命があっても権力集団はな

くならず、前にも増す苛政を敷く・権力があったんでは自由はないのではないか、結局暴力は暴力しか生まないのではないか、と考えることもある。しかしだからといってこんなことを認めてはたまらない。僕は次の前提に立って考えねばならないのではないかと思う。

(1)権力も暴力もなくならない。

(2)政治はなくてもなんともないが、なくすようにしなければならない。

(3)自由も他との平等感も結局個人的なもの。誰がなおしてくれるのでもない。

(4)世の不公平、悪徳、傲慢は我慢できない。

他にもいろいろの要素があるのだろうが、僕がいいたいのは権力も暴力もなくならない、ということなのだ。権力も暴力も必要悪でもなければいいことでもない。現にあるということなのだ。それ位認めてもいいと思う。心理的事情がそれを形成するならそれはいかんともしがたいではないか。

僕が思うのはいかにして他の人よりくる権力や暴力を僕にとって無効ならしめるか、そして己の姿勢としては他者の行為はどうすることもできないという、してはならないしすることができるはずがないという認識、これを忘れないで行為することだ。そして世俗の権力に対しては絶えず逆らうこと。

〃非暴力〃を「非暴力で革命ができる。だから非暴力。」というぐあいに使うんだったら僕はやりきれない。非暴力で革命なんかできない。インドだってできなかったのだ。個人の自恃として非暴力というなら賛成もするし、その人に敬意もいだくが非暴力で革命を、など真に抑圧されている人々、差別感を持たざるを得ないで生活してきた人々、力弱い幼少年、それらの人々に説得力などありはしない。真に説得力のある非暴力という言葉を使わなければならないのだ。

僕は他人に暴力を振るわれてもかまわないと思う。僕はそれに断固対抗するし、他人に暴力を振るわせないよう普段はしているのだから。暴力がなくならない、それはなくすことができる性質のものでもないし、対他関係でしかないと考えたら、暴力が存在してもなおかつ求めるアナルシーこそ、今僕達は考えなければならないアナキズムだと思うのだ。そしてそれはできる。なぜならそういう秩序を空想することができる、そしてそのための現実的手段を僕達は今とらなければならないのだ。僕はそう思う。

団体の政治権力として非暴力とWRIはいっているの

かもしれない。僕はだからWRIについては考えない。WRIのそれはそれでいいと思う。でも個人個人が非暴力という時は集団のドグマに追従しているならいい、それ以外なら求めるものとしての非暴力以外は考えられない。それを言葉の綾で用いるような非暴力は用いるべきでないと思う。

僕は提案するのである。非暴力を自分はどう考えているのだろうか。考えてみようではないか、と。

米国自動車労働界の寸描

ハギシン

ミシガンでFORDに勤めるB氏に会って話を聞いた。

同社ではオイルショック以後の不況で、半永久的なレイ・オフを五～一〇%行った。組立ラインを閉じたことはしばしばあり、そのレションはすこぶる高い。これらを平均すると二〇%のレイ・オフに相当する。好況に転じてからも新規採用せず、オーバータイムをフルに活用してきた。残業代には失業保険など要らないから、企業としては採算が合う。

現在、米国の自動車業界は三年毎の労働契約更改期にある。以前GMは二か月の長期ストをやった。クライスラーは間欠的にやった。フォードモータは一九六七年に最後のストをやっただけだ。そこで今年はフォードを叩こうというのが、労組側の不文律になっている。フォードは金を持っているから、もしクライスラーを攻撃しても、クライスラーが労組の条件をイエスといいそうになれば、フォードが金を出してイエスといわさないようにすることは明らかだ。フォードを叩く理由は、残業をやらせすぎたということになるだろう。

だが、どのくらいストを打つかは、組合員の投票できまるから、今の所わからない。米国のストは、組合費の預金や利子をにらみ合わせてのバクチだ。長期ストの場合、英国のような失業保険制はないが、政府が食料券を発行する。日本でいうと生活保護法に相当する。

どのように展開するか。今後のニュースを期待しよう。

（付記） 9／15日付日刊紙では米合同自動車労組（UAW、組合員総数七十一万七千人）が四大自動車メーカーと労働協約改定交渉をつづけ、14日妥結せず、八攻撃目標Vのフォード・モーター社（UAW組員十七万人）に対し全国二十二州の各事業所で全面無期限ストに突入したと報じた。

☆またフリダム紙10／9日によればガーデアン紙の報道として、二千人の労働者が（主に夜間勤務者）自宅に帰されたと言う。現在このレイ・オフは定期的に繰返され

るので、三五〇人が抗議集会を開き、その際椅子で窓をぶち破り、ゲートをロックし、支配人の食糧庫を破壊した。また表に駐車中の郵便車をひっくり返し、火をつけ、駈けつけた警官には消火用ホースで放水し、管理室はコップや受皿の投擲で報復された。この実力行使で管理者側が交渉の座に就き36時間団交したが、まだ解決に至っていないそうだ。元フォード従業員はその背景を次ぎのように語っている。

「自動車工業の労働は、誰も愛情がもてない程退屈で苦痛な仕事になった。金の為にやるだけですよ。フォード社は競合の激しい市場で先頭を切るとて、新車モデルを期日に間に合わせようとしているんです。奴等はいつだって人間より利益が優先なんだ。」

「黒連」と私の立場

江藤敏和

私が本誌五月号に載せた小文「『民衆』について」に続いて、「黒連」関係の人々からいくつかの批評が出された。私が読んだのは、『黒連』（日本黒色連盟機関誌）第二号（六月五日）に載っている増田厳氏の「自然発生性信仰からの訣別を！ ― リベルテールとの実り多き対話のために ―」、本誌六月号の野上弘氏「アナキストを自称すること及び大衆との分離について」、『黒連』第四号（九月二二日）の「議論より連帯へ」、及び野上弘氏の「大衆問題に対する補足」である。

これらの諸論文を前にして、私は今さらながら「黒連」の人々と私との問題意識の違いの大きさを思い知らされた。ここでは、私の立場を明確にし、「黒連」の諸論に対する批評を試みたいと思うのだが、その前に断っておかねばならないことは、「リベルテールとの実り多き対話」を求められても、リベルテール共通の意見がないため、私個人としてしか批判に応えられないことである。

考えてみれば、私と「リベルテール」の関係はまったくあいまいなままである。近いうちに明確にしなければならないと思っている。

さて、一連の論議のテーマは、アナキストと大衆の関係をめぐるものであったが、私は「黒連」の論理にはいくつかの問題点があると思う。

第一に、「黒連」の主張には、レーニンの大衆観に対する否定以上のものがないことである。たとえば、増田氏は「『大衆』とは、絶対的に『意識的志向性』を今輪

際もちえない物質的集団であり、無秩序（罵言としてのアナーキー）な前理性的情念の集団である」、あるいは「大衆とは政治的領域からみた他者の無名の総体であり、敵ではない流動物として操作の対象として定立される」というレーニンらの大衆観をひきあいに出し、結局それを否定しているにすぎないのではないか。

ところで、増田氏は、これまでのアナキストはレーニンにより定立された大衆観をそのままの形で受けつぎ、「前衛党を拒否する反面『大衆の自然発生性』とやらを他愛もなく奉ってきた」と言うが、この主張の当否を私は判断できない。この点は歴史などに詳しい人に応えてもらいたい。

何はともあれ、増田氏あるいは「黒連」の主張はこうである。「マルキストからアナキストまで含めて、いうところの『大衆』とは自然発生性に結びつけた無意志物集団の虚構でしかなく、我々の陣営内で殊更云々されるべき代物ではない。何故なら、革命にしろ日常的事態にしろ、自然発生的にもの事が、起されることは一切ありえないからだ。『大衆』という概念を前面に出し云々するのは、個人や諸集団の内部動機を抹殺して、政治的場面からものごとを語るに等しい。」

そして、私の考えも、「ボルの図式の単なる裏がえし」として、「大衆主義」と規定されて批判されているのだが、この批判に甘んずることはできない。

私が「民衆」を取りあげたのは、民衆の中にある反権力的傾向を楽天的にアナーキーだと讃えるためでは決してなく、日本の民衆の政治的・文化的状況を正確に知り、その中における私の位置を確めたかったからである。「無政府共産主義」を求め、その原理及び形態を研究している「黒連」の人々が、なぜ我々の生きている社会の状況 ― それは制度であるとともにそれを支えている人々である ― を正しく認識することを軽視するのか理解に苦しむ。

「自然発生性」というのは比喩でしかないこと、「全ての人間は、……世界に対する志向をもつものであり、己れの欲するものを志向する」こと、あるいは被支配者階級の中に権力主義的傾向が存在すること、これらのことはすでに多くの人の常識ではないか。私がそのような常識をもっていないと見られたことは、きっと私の文章が舌足らずであったためだろう。

「黒連」の主張に見出される第二の問題点は、自らの思想及び活動の正しさを検証する基準が明確でないことである。

増田氏は「存在するのは……現実の世界のあり様を破

壊し変えようとするところの貴方であり私達でしかない」というが、要するに、何をどう変えるべきだと主張するのか。そこが明らかでなければ、具体的な協同関係を結ぶことはできないのではないか。

野上氏は、「大衆主義の持つ全体主義的構造」（この意味が理解できないが）を批判し、「分離という視点」を強調している。分離できるということが一つの基準だろうか。だが、「アナキストがアナキストを自称し、大衆と自己とを区別するとは、分節社会において、ある集団がもとの集団の権力主義的傾向に異議をとなえて、分離していくということに他ならない」とはどういう意味か。これだけだと、アナキストは自分の利益だけを考えるエゴイスト集団と見られそうである。

アナキズム運動に加わる意義を、アナキズムの思想及び運動の社会に与える影響から明示する必要がある。それがないと、アナキストになることは、「一個の決断」という域を出ないと思う。

（未完）

野火

☆無政府主義☆《リベーロ四二号》リベーロは「関西地区の情報紙」から「研究センター通信」に変わったとのこと。しかし情報伝達には努力を傾けようとしているようです。諸君、会員からの葉書による参加を求めています。葉書に伝えたいことを書いて送る、するとそれを写真にとりオフセット印刷するのです。皆様も葉書によって情報を送り、リベーロへ参加して下さい。

京都市左京区田中関田町二二の六四　リベーロ社

《黒旗の下に九号》いつも感じるのだが過去だけでなく未来への執念がみられない。戦うプロレタリアートは現実に満足することではなく、社会的不合理の告発と変革への参加を行ない、そうしてそれを通してきたえられていくものではあるまいか。日本自協史（戦前のアナ系労働運動の一つ）はおもしろいし考えることもある。しかし過去の自分達の正当性、反省だけでなく、これから何をしていくか、どうするか、そんな事も誌面に載せて欲しい。

東京都文京区後楽二の七の五　啓衆ビル4F

黒旗の下に発行所

☆十月三日・サカサのイシ集会七・『猥褻な天皇』を読む☆こんどサカサのイシの人達が『猥褻な天皇』という本を作った。約二六〇頁、ガリ版ながら立派に作られている。一部三〇〇、送料一二〇円。

僕は天皇制はなくなってほしいと思う。しかしこれは

仏教やキリスト教もなくなってほしいといっているのと同じだと思う。そのうち天皇は制度としてすらなくなるだろう。しかし天皇制の中にある宗教的なもの、これはなくなるのだろうか。鎮守の森はやすらぎの森だと思うけど、そんな所にはたいてい宗教的祭物がおいてある。そんな所にも宗教と人の精神のかかわりあいが感じられるのだ。宗教もなくなってほしい、共和主義的反天皇ではない反権力反天皇制そんなものを考える。

小金井市中町三の十二の二二直昆荘に号
長谷川修児方サカサのイシ

☆反天皇制通信一号☆反天皇制をアナキスト的反権力へと書いてある。でもこの通信をもっと広範な市民大衆と共に考えるための通信にするならアナキストなんて使わなくていいのではないか。天皇制の君主制的性格を市民や大衆は拒絶しているし、その面から天皇制をまずつき崩したらどうだろう。憲法破棄、元号反対、宮内庁廃止、私有でない神社の宮司追放公民館化、いろいろあると思う。

東京都新宿区三光町一四、東晃ビル、月の輪出版方
原田めぐみ

☆北海道で道庁爆破容疑で大森さんがつかまっているのは新聞等で皆知っていると思う。この件に関し、岐阜、名古屋等では組織図とか人脈図を作り無政府主義関係の団体や左翼関係にずい分露骨に調査しているという。何の関係もない人まで行きすぎた捜査を行ない、間接的に弾圧しているという。『政治警察による不当逮捕起訴を糾弾する！』というビラを無政府主義者連盟東海地方準備会が僕達の所へおいていった。

☆札幌救援会はこのことに関し〃道警本部長、札幌地検検事正〃に抗議文を出している。要求事項は(1)「大森」君を即時解放せよ！(2)物証もないのに本人の自供を得ようとする拷問をやめろ！

逮捕容疑の証拠は根拠が薄弱である。にもかかわらず逮捕したまま取調べを強行し、なんとか自白を得ようとしている。そのためには首を締め、髪を引き、指をねじり、耳元で大声でどなり、「言わないなら体に言わせて見せる」と黙秘権を否認し拷問を正当化しようとすらしているらしい。更に取調べは午前八時より深夜零時まで、テレビカメラをつけた部屋で行なっているという。札幌救援会に支援を！

☆九月七日、並木英夫さんが訪ねてきた家族によって変死体で発見された。並木さんは七二年十二月の大阪愛隣労働総合福祉センター爆破事件で逮捕されウソの自白を強要されたが裁判でそれを暴露、最近は品川区のアパー

トに住んでいた。おそらく自殺だろうが誰が彼をそこに追いやったのだろう。彼は釜ヶ崎の勝浦飲食店で活動を続け、十二月二六日の事件後、大阪府警の「釜ヶ崎赤軍」の仕わざとの見込み捜査により逮捕されたのである。新聞はそんな彼すら『未完成の爆弾四個と爆弾製造用の機具が部屋から見つかった』と報導している。釜ヶ崎共闘会議釜ヶ崎爆取救援会はこれを虐殺として九月二四日集会を予定している。

☆黄清雲さんの国籍確認訴訟が九月二〇日結審になったらしい。この結審は敗訴を意味するらしく、半永久的な収容か台湾への強制送還につながっていると林景明氏を囲む会ではいっている。十月十日黄清雲氏（入管収容中）救出のための緊急集会が音羽出張所で開かれるとのこと。なお黄さんと同じ施呼さんの公判が十一月十五日東京地裁民事二部で十時半より開かれる。充分審理するためにも傍聴にいって裁判に興味のあることを示して下さい。台湾への強制送還は死につながっていることを考えて下さい。

☆八月二六日の朝日新聞朝刊は『扼殺だった大杉栄』として大杉等の「死因鑑定書」がみつかったことを報じている。

☆図書（岩波書店刊）十月号は「〃謀叛論〃のこと」「管野スガのこと」を福田歓一さん、絲屋寿雄さんがそれぞれ書いている。

★過日、東京駒場にある近代文学館に行き、過去のアナキズム系の雑誌の複写を願った所、必要箇所の指示を求められ、雑誌全部のコピーは著作権とのかねあいで不可といわれた。アナキズムに親しんでいる人々の中にも著作権を主張し云々する人がいるし、又個人の努力をコピーという安易さに置換されてはたまらないという気分もあるだろう。しかし少なくもアナ系のものはコピーでも拡まってくれればありがたいという気があり、それほど著作権を云々するとは思えないのである。これではかっての先達の人々の意志がふみにじられているのではないかとすら思えるのだ。最近コピーに関して著作権との問題をふくめ、法律化していこうとの動きが社会にはある。僕達もたとえばリベルテールの雑誌及び掲載論文に対し著作権を主張しない声明とか、著作権に関する放棄の雑誌への明記とか、そんなことを話しあってみたい。もちろんこれは僕の個人的考えだが。（山本二夫記）

長谷川進君永眠

その深い学的造詣で戦後のアナーキズムに重きをなした長谷川進君は厚生年金病院で胃潰瘍の手術後肺炎を併発し10月17日永眠しました、七四才でした。

海外だより

マーチン・ソースターは語る (1)

☆オープンロード（街道）紙はカナダ・バンクーバーで発行され、色づりのポスター付き32頁建の新聞だ。誌名はホイットマンの詩＜街道の歌＞「ぼくは裸足で、軽やかな心で街道を行く／ぼくの前には健康な自由な世界がある／長い褐色の道はぼくの行きたい方へ伸びているのだ。」に拠り、政治的活動家集団が都市地下活動、ドルッティの伝記発刊案内、女性運動、インデアン問題等を書いている。ここに昨年末九年に亘る拘禁から解放を闘いとったプエルトリコの黒人アナーキスト、マーチン・ソースターとのインタビュー記事がある。次はその抄録だ。

問「貴方は刑務所に入っている間に＜刑務所の法律家＞になりましたね。法律をマスターして刑務所生活にプラスするものがありましたか？」

答「五〇年代に、前の刑期中勉強して刑務所での法律家になったのです。そうなると人権闘争で幾つか勝ちとることができました。多くの人はそれを囚人の権利と言うんだが、私は区別をしない。基本的にやっぱり人権なんですよ。ここ（刑務所の外）だって一個の刑務所ですからね。貴方が国家によって抑圧され、国家が管理する限り、ここは保証の最低な刑務所で、あすこ（刑務所の内）は最高に保証された社会ですよ。私は囚人に対し拒否されていた各種文献、政治文献などを読む権利、弁護士に送る手紙を検閲させない権利、前もって罪科を明示しない場合、例えみせかけにしろ何らかの裁判をしないで独房に閉じこめられるのは拒否する権利、等を勝ちとったんだ。…それから他の受刑者の法廷闘争を支援する権利、以前だと貴方が刑務所付きの弁護士であっても他の囚人の供述書で貴方がその人を支援しているのが判れば、それだけで独房へ送られていたんだ。（ソースターは閉じられた社会である刑務所内でrectal examinationsを拒否したため、7名のガードに暴行を受けたことを語る）

問「ところで貴方が看守たちに抵抗したのはどういう具合に彼等によって正当化され、それが裁判でどうなったのですか？」

答「いやよくある手ですよ。ここ（一般社会生活を指す－訳註）だってお巡りに貴方が立ちどまらされるでしょう。髪が長い、ひげがのび過ぎている。要するに体制に逆らった生活スタイルを示すといつもやられますね。

私はヒゲが1/4インチのびたため独房で数年過したのです。ここだって警察は貴方の服装や態度が気にいらないとおどすでしょう。そこで貴方が質問に答えないで逆に問いたゞす訳。「何んだってぼくをおどすんだ？何を探っているんです？令状を持っていますか？ぼくは……」すると奴は呶鳴るんだ。「黙れ！壁に向って立て！」とね。更に貴方が質すと攻撃してきて、貴方を車にむけて押しつけ、身体をもたせかけさせて、下股を蹴り飛ばしぶちのめすでしょう。それから自分達の暴行を隠すために、貴方を逮捕し、警察へ連行する。公務執行妨害と抵抗罪です。遂には一連の罪名がついてきて貴方に対する彼等の犯罪を正当化するんです。これが本当の犠牲者を犯罪者に仕立上げ、加害者である彼等が犠牲者になる手口なんだ。いづれにせよ私は7名のガードに抵抗したということで陪審員も私を有罪にしたのです。」（ソースターは刑務所内のメッキ工場のスト組織化に働き、モミアゲが長い、ヒゲが伸びすぎている。等で家族との面会取消しや独房行きの恣意的罰則撤回に尽したと言う）

問「北米で受刑者組合や受刑者支援グループができつつあります。貴方は何らかの全国組織としての受刑者組合というようなものが出来ると思いますか？」

答「ええ、最後にはできますよ。だけど刑務職員と厳しい闘争があります。彼等はわれわれに対し、独房行き、殴打、会話禁止、刑期加算など対抗措置をとっている。これが受刑者大衆をおじけづかせ妨害効果をもたらしてるんだ。それから彼等は内部に協力者や密告者を配置して、＜静まれ＞とか＜あゝいう騒ぎ屋に同調するな＞とか＜かまうな＞＜巻きこまれるとこから出られない＞など…受刑者の中で宣伝している。それに内通者や仕掛人もいてお国の為に働いているんだ。刑務所のような所では人は自分の最愛の者から隔離されているから、抑圧的処置は効果がある。私だって受刑者総数二〇〇〇人中の35人乃至40人の活動者のうちで更に孤立してひとりで闘ってきたんだ。時たま一人か二人の仲間をみつけてもその人達は他の刑務所に移されてしまった。クリントン刑務所では一八〇〇～二〇〇〇人のうちあのrectal examinationに抵抗したのは4名ぐらいだった。どんなにひどかったか判るだろう。注意したいのはその中にも僅かながら革命家とか活動家はいたんだが、ここでと同じく言葉だけで行動はしなかったことだ。」

問「刑務所での日常生活ではどうやっていましたか？ヨガをやってたと聞いたが？」

答「一九五六年から私はヨガ行者でした。…私のやってるヨガは伝統的なのとは違っていて、肉体的精神的に

あうようにやるだけで、ネハンや化身のためじゃないんだ。そんなのは信じないし、大体本当のヨガ行者は地上的なものから離れ、自己革新を促進する。それに圧迫者を攻撃しない。…私は自分では革命的アナーキストであるのと同じぐらい革命的ヨガ行者だと思うが、やってるのはこの抑圧的な国家の重圧をはね返すだけの肉体的精神的訓練を実施しているんだ。その上私はこの地上的なものが大好きさ。セックス、金、高揚ーマリファナーが好きだー判るだろう？こういうのをあきらめて洞穴にこもるとか、世俗のものを離れる訳にはいかないんだ。地上的なものが好きだと言っても、それは先づ抑圧的国家を破って、これを平等社会に取りかえ、第二に現在少数者が独占している財を広くばらまいて、われわれ皆が比較的豊かに生活するようになることだ。みんなにとってこの地上は十分豊かなんだからね。私が言いたいのはここにはわれわれが楽しむだけのものがあり、私はそれを自分に対し否定しないんだから、他の人も同じだけ楽しむべきだと言うことなんだ。…私は五三才だけどまだしっかりしているよ、それはヨガのおかげで身心を鍛えたからで、あれが武器だった。金だって体制に打ち込む弾になるんだ。私は金に反目しないよ。（彼は小さな書店を経営していた当時を語り、それが若者達の拠点となり、やがてプエルトリコ黒人騒動に巻きこまれ、自分がそのスケープゴート〈犠牲の羊〉にあげられたのだと答えている。なお米国で現在活動家達が文化革命〈主として音楽によるーロック、ジャズ－ビート等〉を放棄して労働運動再編に向う傾向があるが、彼はそれを認めた上で、下層階級としてのルンペンや黒人との協働を主張し、異文化の相互の働き合いによる意識の変革を重要視している。また運動の現状を述べ大衆の中に60年代の高揚した精神がみられない。一九六七年にはブラックパンザー党が存在したし、ＳＤＳも各大学で高揚していた。その他多くの活動的なグループが社会のダイナミックな部分、特に若者達を動かしていた。それからヴェトナム反戦運動があった。そうした運動に参加していた人びとはどうなったのだろうか。彼は自分なりに答える。）…部分的には国の反動施策、ＦＢＩフーバ計画に原因がある。それに反戦運動が一つの出路だけだったこと、つまり大学のキャンパスを基地にしたという近視眼的な運動によるのだ。コミュニティに基地をもたず根を張らなかったのだ。そこでヴェトナム戦争が終ると、ヴェトナム反戦運動も終りだ。（つづく）